

OMNIBUS

大阪医科大学図書館報 / 大阪医科大学附属看護専門学校図書室報

C O N T E N T S

Evidence-Based Medicineと図書館〔河村慧四郎〕	2
夢と理想を掲げた時代〔岩崎尚彦〕	3
患者に〔人間としての尊厳〕は不要か—21世紀の医療環境—〔2〕	5
私が感動した本〔白濱麻理〕	6
100万回生きたネコ〔彦坂玲子〕	7
ニューメディア情報室の利用について〔大野浩二〕	8
他大学図書館訪問記(6)〔大阪大学附属図書館生命科学分館の巻〕	10
書評「カリカチュアの世紀」〔中川一成〕	11
近畿地区医学図書館協議会第4回シンポジウムに参加して〔乾 瑠美〕	12
本学教職員等著作寄贈	12
お知らせ	13
新人スタッフ紹介	15
図書館業務日誌	16
編集後記	16





Evidence-Based Medicineと図書館

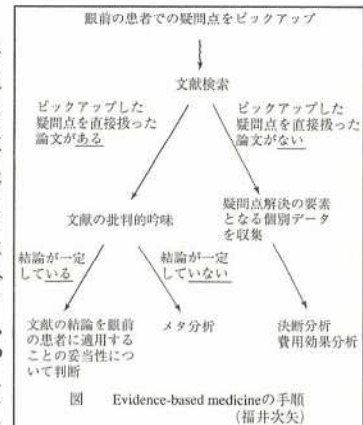
河村 慧四郎

Evidence-based medicine (略してEBM) の用語と概念は1991年にACP Journal Club (March/April, A-16)に初登場したが、以後、このキーワードは燎原の火のように広まり、最近の創刊雑誌「Evidence-Based Medicine」、「Evidence-based Cardiovascular Medicine」、「Clinical Evidence」、「Evidence-Based Practice」などのタイトルや、新書「Evidence Based Cardiology」、「Evidence Based Practice in Primary Care」、「Stroke Units, An Evidence Based Approach」などのタイトルにももじって使用されている。EBMは日本では「根拠に基づく医療」、「実証医学」などと呼ばれるが定着した訳語はなく原語のまま用いられることが多い。

EBMとは「信頼出来る最新のデータに基づいた、理に適った診療」のことを言うが、現在、EBMで最高の信頼がおかれるのはランダム化対照試験により、患者の転帰(死亡、心事故、運動耐容能、QOL、効用値など)をエンドポイントとした研究の結論(証拠)である。なお同類の試験成績を集積し統計処理を重ねるメタ分析の結果も証拠とされる。これまで、ランダム化比較試験の報告はすでに総数で25万ないし100万件もあると言われているがその活用には査読者のマンパワーとコンピュータ・サイエンスを駆使することが前提となる。

EBMが関連する領域は治療学のみならず最近では診断学、病因論、予後学、医療経済、ケアの質、予防医学、診療のガイドライン作成などにも及び各領域で明確な証拠に裏打ちされたパラダイムの再構築が行われる趨勢にある。

EBMの実践は臨床医が眼前の患者の診療に役立つ証拠のあるデータを入手し、その真価を評価し適用することであり、一般的には図に示す手順を追う。しかしこれは、コンピュータ・リタラシーのある臨床医であっても直ちに一律に出来ることではなく、どうしても最小限度のノウハウの学習が必要である。他方、最近、二次的情報雑誌の創刊が目につく。これは多くの原著論文を臨床疫学的視点から査読し、信頼できまた有用と判定された各論文を1頁以内のダイジェスト版にしそれぞれに情報利用者としての専門医の論評を付記し編集した雑誌で、多忙な臨床医にとって大変有用である。たとえば前述のACP Journal Clubは内科一般を、またEvidence-Based Medicineは内科、総合(家庭)診療、外科、精神科、小児科、産婦人科をカバーする。ACP Journal Club(1991年創刊)はAnnals of Internal Medicineの姉妹誌で毎号の本文は30頁程度であるが、査読の対象となる雑誌は表に示す如く主要なるもの約



50、付加的なものほぼ100である。Evidence-Based Medicineは1995年創刊の隔月刊誌で毎号の本文はやはり約30頁であるが査読される雑誌は計120である。なおこれらの雑誌の情報はCD-ROMとしても入手できる。その他The Cochrane Libraryは3ヶ月毎に発行される最新のEBM情報のCD-ROMで、これは英国で1992年に発足したコクラン共同計画のプロジェクトの1つでインターネットでも利用可能である。現在EBMによる診療がどの程度行われているかは不明な点が多い。1995年、英国の大学病院内科に入院中の患者については、53%がランダム化比較試験で有効性の確認された治療をうけ、29%は心停止時の心肺蘇生や出血時の輸血などという有用性が自明で放置すれば非倫理的になる処置をうけ、証拠のない治療をうけたものは18%にとどまったという。ほぼ同様のデータは1998年カナダからも報告されている。いづれにせよ、文献の結論の信頼性を評価しそれを眼前の患者に適用するか否かはあくまでも個々の臨床医の判断にゆだねられるわけで、その意味でEBMはおしきせの「料理本」ではないのである。なお、留意すべきはこれまでのEBM情報は主として白人についてのもので、そのまま日本人に当てはまるか否かも充分検討する必要がある。

EBMと図書館の関連を考えると、図に示したEBMの手順のうち個々の情報の原著は図書館で求められ、MEDLINEへのアクセスによる文献検索なども図書館を介して行われる。文献の批判的吟味やデータを適用する妥当性についての判断は二次的情報雑誌にみられる論評などが参考になることも少なくない。この種の雑誌は、図書館と言わず、多忙の臨床医がいつでもどこでも手軽に読める状況が望まれる。

先にも述べたが今後、臨床医がEBMを実践しその実を挙げるためには一定の学習が必要と思われる。海外ではすでに臨床疫学・EBMを学部教育に取り入れた大学や、International Clinical Epidemiology

November/December 1998
Volume 129 Number 3

ACP Journal Club

Linking Research to Practice in Internal Medicine

Journals Reviewed for This Issue*

Age Aging	Arthritis Rheum	Gastroenterology	J Intern Med
Am J Cardiol	BMJ	Gut	J Neurol Neurosurg Psychiatry
Am J Epidemiol	Br J Gen Pract	Heart	J Vasc Surg
Am J Gastroenterol	Br J Rheumatol	Hypertension	Lancet
Am J Med	CMAJ	JAMA	Med Care
Am J Public Health	Can J Cardiol	J Am Board Fam Pract	Med Aust
Am J Respir Crit Care Med	Can J Gastroenterol	J Am Coll Cardiol	Neurology
Ann Emerg Med	Chest	J Am Geriatr Soc	N Engl J Med
Ann Intern Med	Circulation	J Am Med Informatics Assoc	Pain
Ann Med	Clin Invest Med	J Clin Epidemiol	Spine
Arch Fam Med	Cochrane Library	J Fam Pract	Stroke
Arch Intern Med	Crit Care Med	J Gen Intern Med	Thromb
Arch Neurol	Diabetes Care	J Infect Dis	

* Approximately 100 journals from other areas of health care are also reviewed. This list is available on request from McMaster University (address appears on page A-5).

Network (INCLIN) を介した普及活動も見られる。我が国でもEBMの学部教育にむけてのカリキュラム試案が提案されている。

因に、我が国の臨床医学は国際的に基礎研究に比較して貢献度が低いとする意見がある。この国で戦後、短期間で世界に冠たる高齢化長寿社会が出現した背景には、他の先進国とは異なる臨床的エビデンスがあると考えられるが、厚生省が定める出来高払いの保険診療の下では、医療効率性などのEBM的研究には大きな限界があると考えられる。国際誌に我が国にEBMのデータの引用がまれなことの背景には、研究デザインそのものに問題がある場合やデータは信頼性があっても日本人に特徴的にとどまる場合があるかもしれない。例えば同じ治療薬でも白人に比し日本人ではかなりの少量で有効性を認めることが少なくないのである。さらに日本では治療薬のランダム化比較試験を行う体制が欧米先進国より大幅に遅れている面が関与していることも明らかである。EBMは云うは易く、行うはまことにチャレンジングである。

参考文献

Sackett LS, et al: Evidence-based Medicine: How to Practice and Teach EBM. Churchill Livingstone, New York, 1997

福井次矢: Evidence-based Medicineの手順と意義. 日本内科学会雑誌 87: 2122-2134, 1998

ACP Journal Club, November/December 1998 Volume 129 No.3

(かわむら・けいしろう 第三内科学教授)

夢と理想を掲げた時代

岩崎尚彦

昭和40年教養部が出来た年に就職して、以来30有余年経過して、定年の年度となった。エッセイを頼まれ書こうとしたら思い出が多過ぎてまとまりがつかない。机の引き出しの奥を探したら、教官連絡会の古いメモが何冊も出て来た。昭和40年(1965年)大阪医科大学進学課程(教養部)設立の年以後のものである。その頃、教官連絡会と言う会議が常勤の全教員7名で構成され、毎週木曜日に開かれていた。入学試験、人事、教務、学生関係、将来計画等すべてがこの会議で報告され、相談され、議論されていた。私は教務委員を仰せつかっていた。教養部という名称だけが存在していて、実態は何も無い状態だったので、原則を作り、方針を立てることから会議でやっていた。

最初に渡された学則の別表では進学課程の修得単位は合計90単位で、人文、社会、自然は、それぞれ3科目12単位以上の選択制度であった。そして物理、化学、生物、数学の基礎教育科目も4科目中2科目8単位以上の選択であった。

2年目に入って授業科目が増え、教員の数も増え、教務委員としての私の仕事も増えた。常勤とは言っても文科系の人達は授業と会議の時だけしか出て来ない。それで学生たちと対応するのは、毎日教養部の実験室に来ている私一人であった。これはその後も続いた。2年目の最後に開かれた教官連絡会、即ち第1回の進級判定会議は、判定の基準を作る事から始めたので大変な会議であった。しかも、増えた分も含めて合計98単位になっていた提供科目が、全単位必修と言う事になってしまった為、まともに適用するとクラスの半分以上が留年になってしまう事態になる。結局、相談の結果、提出された成績をもとにして「進学課程を修了したのと同様な学力を持つ者」を判定して進級させることにした。勿論、文部省基準の64単位以上であることが条件であった。科目別単位数を算出し、二日間の議論を重ねた結果、進級、仮進級、留年と3通りの判断が出た。仮進級はこの時だけで以後は行われなかった。手間を掛けた割には実際的な効果が無かった為である。学生の教育について真剣に議論した判定会議の方式は、昭和44年10月教養部会議と言う名称になってからも受け継がれた。この時の判定基準は、その後も、その時代に合わせて改訂されながら使われた。選択単位制度を作った時もこの判定基準をもとにした。その時、提供単位数は増やしたが、修得単位数は減らして80単位にした。その後、学生の状況に合わせて最後には74単位になっていた。それ

でも当時の文部省基準の64単位よりは10単位多かった。

30年の間に学生の気質や性質は随分と変わった。勿論、大学を取り巻く社会環境が大幅に変化しているから当然のことであるのだが、目的をはっきり持ったタイプの人最近あまり見掛けなくなった。特に社会正義を信念とする行動的な学生は見当たらなくなった。

机の引き出しを更に整理して行くうちに、古い封筒が見つかった。表書きに船木三郎先生の名前があった。開けてみたら中から変色した便箋が出て来た。昭和41年秋、船木先生の告別式の時の弔辞であった。読み返して行くうちに、この30数年間の始まりとなった時代が思い出と共にありありと蘇って来た。初代生物学教授船木三郎先生、享年46歳、三十三回忌の御供養の意味合いを込め、敢えて復刻して、お読みいただくことにした。

弔辞

船木先生、生物学教室を代表して私がこのような言葉を述べることになろうとは夢にも思っておりませんでした。

先生を中心とする新しい生物学教室が軌道に乗り始めた時に突然先生は去ってしまわれました。アメリカのミシガン大学での一年半の研究で、世界で始めて冠門脈平滑筋の自動収縮性を見出され帰朝されてから、益々多忙になられた学界活動の合間を縫って、教養部の創設という労多き仕事を遂行されました。生物学教室の発足当初、先生は私達に、いろいろな理想や夢などについて話されました。「将来、医師として研究者として立派な仕事を続け得る人間の基礎を作りたい。」又、「何かとても大きい夢を抱いてそれを追いかけていくような人間を育てたい。」などと。そういう先生をしたう学生が、生物学教室に集まって来ました。先生の御指導は先ず、「生命現象の基礎的な理解を深めること」から始まりました。研究室で、夏の岩屋の臨海実習で、そして研究発表会で、データの一つ一つを細かく追求され、分析される先生の学問的情熱に燃えたお言葉に私達はひきつけられました。



昭和40年秋、最初の生物学教室員達と、くろんど池ハイキング（後列左端）

昨年夏、臨海実習の時、まだ明けやらぬ朝風の海に、おもりをびゅーんと飛ばして釣をされているお姿は、まだ目にうかびます。ですが既にその頃から御身体の具合が少し悪くなられていました。好きな磯採集をなされていた時も、今から思いますと、憎むべき病魔は、先生を蝕み始めていたこととなります。（中略）

夏休み後、先生が、時折襲って来る激痛を耐えておられることが、私達にも感じられるようになりました。その居ても立っても居られないような激痛の最中に研究室に出られその空気を吸うことに満足を感じられていたのです。

この二十二日、再び入院された後も講義のこと、試験のことについての念入りな配慮がありました。

一昨、二十九日夕刻、先生は遂に帰らぬ旅路につかれました。

船木先生、先生のお話はもう聞けず、お目にかかることももうできません。しかし先生、先生のお言葉は、私達教室員一同の胸の中に生きております。今、静かにそれをかみしめながら、今後とも先生の御志をついで生物学教室を発展させて参ります。私達は先生が安らかな眠りにつかれることを祈ります。

昭和四十一年十月三十一日

大阪医科大学生物化学教室 岩崎尚彦

船木先生危篤の連絡を受けて取るものも取り敢えず付属病院に駆けつけてから、御逝去そしてお通夜、お葬式の準備というあわただしい最中、徹夜でこの原稿を書き、毛筆で清書した。悲痛な気持ちを押しえつけ光松寺での告別式で読み上げた。いま現在30年以上も経過してから読み直してみると、この体験は私の大阪医大での勤務の原点の一部になっている。「物事の始め」というのはとても大事である。夢を抱き理想を高く掲げることが無ければ方針も立たないし成果も得られない。創設以来30数年既に教養部は消滅した。しかしそこで医学生としての第一歩を踏み出した人達は、現在、良き臨床医として、良き研究者として、社会的にそして国際的に活躍している。その方達のお力により、将来、大阪医科大学が更に一層発展することを期待しながら、私は私の演じて来た役割を今終わることにする。

(いわさき・なおひこ 生物学教授)

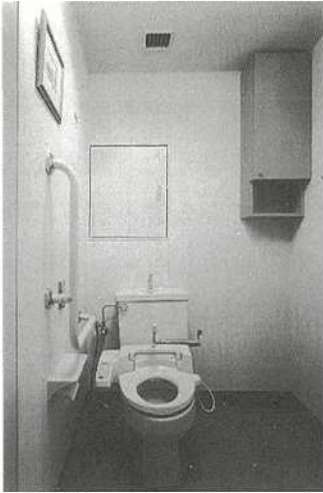
患者に「人間としての尊厳」は不要か—21世紀の医療環境（2）— 牧 彰

「病室に専用トイレなど必要ない」威圧的で高ぶった声が会議室に響き渡り、一瞬、室内の空気は重苦しく凍り付いて、気まずい沈黙が辺りに漂った。新病院の設計会議での出来事です。病棟の全病室に専用トイレの必要性を説明していた私は、突然のことで頭の中が真っ白になり、しばし呆然自失の状態でした。

各病室内にトイレを分散して設けることを、病院建築用語で「分散トイレ」と言います。トイレを分散化すれば集約化に比べて必然的に床面積が増し、工事費も嵩みます。結局は限られた床面積と工事費の中での配分の問題であり、病棟のトイレに投資するよりも医療設備をもっと充実させたいという意見もあながち頷けないこともありません。しかし、それはあまりにも一方的な医師側の論理であり、あまりにも患者の存在を無視した理念です。市民病院としての療養環境を一層向上させ、患者の人間としての基本的権利をより尊重しようとするれば「分散トイレ」は不可欠です。患者の人権を尊重する欧米ではごく普通のことなのです。

院内の力関係は歴然としていて、院長不在の状況で荒れ狂う部長職の医師を宥められる事務職など誰もいませんが、断じてここで引き下がるわけにはゆきません。病院を経営し、患者を診療する医師の論理もあるかとは思いますが、患者の立場を誰が擁護出来るのでしょうか。それはもう設計者しかいないのです。地域住民10万人の声なき声に励まされて、設計者としての使命を果たすために、私は意を決して直ちに説得に努めました。「先生。今はお元気なご様子なによりです。しかし、元気な方もやがては齢をとられ、いずれは患者の立場になるのです。その時になって、しまった！と思っても手遅れです。病室内に専用トイレが本当に不要かどうか、患者の身になったつもりでじっくりと考えてください。どうかお願いします」

冬季や手術直後などには、寒くて遠いトイレまで行けず、排泄行為は看護婦などの他人の世話にならざるをえません。これ以上人間として惨めなことは他にあるのでしょうか。同室の隣人に、音や臭気の気がねをしながらポータブルトイレを使わなければならない。これもまた同じです。病室内



赤穂市民病院の分散トイレ

に専用トイレがあれば、ちょっとした介助で自力で排泄出来るのです。「分散トイレ」の是非は、病院が患者の基本的な〔人間としての尊厳〕を認めるか否かの違いなのです。要は、医師を代表とする医療従事者と施設を設計する建築家の人間性の問題なのです。今世紀のコンセプトは「自由の精神」であり、来るべき21世紀は「共生の理念」であると言われています。政治・経済・芸術・文化などの様々な領域で地球規模の交流を深め、内外の人たちが互いに助け合い、共に生きることを目指すためには、医療の分野においてもグローバル・スタンダード（国際基準）を規範としなければなりません。わが国だけの医療事情は21世紀にはもはや通用しないのです。

一時はどうなるかと思った修羅場も、幸いにも私の建築への情熱と、市民に愛される病院にしたいと言う熱意に共感してくれたのか、幾人かの医師から入院時の排泄にまつわる辛い体験談などが次々と語られ、それで何とか病室内の専用トイレは渋々黙認されました。ご支援いただいた先生方には心から感謝しています。開院後ほぼ1年になりますが、市民の皆様には大変喜んでいただいています。思えば感慨無量です。

（まき・あきら 元日建設計社員 本学総合研究棟・本部図書館棟設計担当）

私が感動した本

白濱麻理

私が読書をしていたのは、小学生の時くらいで、中学・高校ではあまり読書をした記憶はありません。本に対してあまり興味がなく、本を読む時といえば、課題として読書感想文が出された時だけでした。こんな私が本に興味を持つきっかけとなったのは、大阪医科大学附属看護専門学校に入学し、授業の一貫として用いられた、星野富弘さんの「愛、深き淵より。」に出会ったことです。著者である星野富弘さんは、昭和21年4月24日に群馬県に生まれ、群馬大学教育学部保健体育科を卒業し、中学校の体育教師として赴任しましたが、そのわずか2ヶ月後に、クラブ活動の指導中に誤って墜落し、頸髄損傷を負い、以来手足の自由を失ってしまいました。9年間の病院生活の後、不治のまま退院し、手足の運動機能は回復しませんでした。口に筆をくわえてすばらしい詩画を書くようになりました。この本は、きわめて不自由な全身機能の麻痺といってもよい星野さんの、障害との闘いと詩画に楽しみを見出して、筆を口にくわえてそれを書き描くようになるまでの精神史です。星野富弘さんが書き描いた詩画の中で、私が1番心を魅かれたのは、「なずな」という詩画です。

「なずな」

神様がたった一度だけ
この腕を動かして下さるとしたら
母の肩をたたかせてもらおう
風に揺れる
ペンペン草の実を見ていたら

そんな日が
本当に来るような気がした

この詩画は、星野さんが自分を無にして、つくしてくれた母のことを思い書き描いたものです。母は、ベッドと窓の間の一畳にも満たない狭い所で寝起きしながら、星野さんの看病を何年もの間続けているということで、星野さんは、そんな母親に対して感謝の気持ちを書き描いたものだと思います。私はこの詩画を読んで、すごく感動しました。今まで自由に動かすことのできていた腕が急にまったく動かなくなってしまう、その腕を神様が1回だけ動かして下さるとしたら何をするかというので、その1回のチャンスを自分のことに使うのではなく、自分のことを真剣に看病してくれている母親の肩をたたくために使うという所に感動しました。

星野富弘さんは、この本の文頭に、

二番目に言いたいことしか
人には言えない
一番言いたいことが
言えないもどかしさに耐えられないから
絵を描くのかもしれない
うたをうたうのかもしれない

と書いています。だから、星野さんの書き描いている詩画には、星野さんの素直な気持ちが表現されているので、1つ1つの言葉に、ずっしりと重みを感じます。

星野さんは、この「愛、深き淵より。」を書き上げるのに約7ヶ月の時間を要したそうです。書き始めた頃は、口に筆をくわえて文章を10分くらい書くと、熱が出てしまっていたそうです。この本はふつうの闘病記録と違って、筆をくわえて綴られた星野さんの生命の記録なので、多くの人に読んで欲しいと思いました。また、看護婦を目指す者として、患者の心理を知ることが出来ると思います。

私は、この本との出会いをきっかけに、星野富弘さんの「四季抄 風の旅」という花の詩画集を読みました。星野富弘さんの素直な気持ちを読むことで自分も素直な気持ちが持てるようになったので、たくさんの方々に読んで欲しいと思います。

(しらはま・まり 第二看護学科 1年)

100万回生きたネコ

彦坂玲子

文字がっぱいの教科書ばかり読む日々が続くと、たまには息抜きがしたくなる。そんなとき、私は絵本を読む。これは読むと言うより、ながめて楽しむといった方がいいかもしれない。

絵本は、その名の通り、絵とちょっとした物語が書かれてある。色鮮やかな画面を追いながら物語を楽しむのは心がなごむ。素直にもなれる気がする。それにいろいろなことが想像できるのもいい。最近では現実の私と主人公を置き換えてみることもしばしばある。もちろん幼い頃にもやった

ことだろうけど、ある程度人生の方向が決まってきた今では、かなり違っているように思う。

そんなちょっと違った楽しみをするとき、私が好んで見る絵本に「100万回生きたネコ」がある。いろんな飼い主のもとで一生涯を終えて、また生き返る。そして100万1回目にしてノラネコとなり、本来のネコとして素直に生き、その生涯を終える…という話だ。買ったのは大学入学当初で、はじめは何度も生き返るネコのvitalityに感動し、素直じゃないところには共感を覚え、ネコにもいろんな生き方があるんだなあと単純に思っていた。このネコが自分なら…。きっとノラネコになる前に満足してしまっているかもしれない…なんて情けないことを思ったり、気に入った主人のところに何度でも舞い戻ったりするかも…といじらしいことを考えたりした。また、ノラネコはきっと卒業した時かなあ…などと図々しいことを思ったりもした。

今、あらためて考えると、私には当然ノラネコなんてまだまだだし、一回も生き返っていない。一つもステップを越えていない。これまでいろんな人と関わり合ってきたけど、極々小さい枠の中での出来事だったと素直に思えるし、これからはもっと広い交流を深めなければいけないと思う。もうこれで最高だなんてことは絶対にありえないと知っていたし、そんなの当り前のことだとも知っていたつもり。でも、きちんと見据えて考える時間をもつと、より一層心に刻まれる感じがする。昔とはずいぶん違ってきて、ちょっとは成長したのかも…なんてね～。私はこんな風に考える。

現実には、ネコのように一話一話完結しないから、全く一からの再スタートはできないけれど、それだけ経験を生かしてなんとかやっていけそう。幼い頃に読んでも何か教えられるような絵本は、いつ読んでも同じように何かを教えてくれるように思う。眺めるだけでも楽しめる絵本から、たまにはこんな心のリフレッシュもいいもんだ。

(ひこさか・さとこ 6回生)

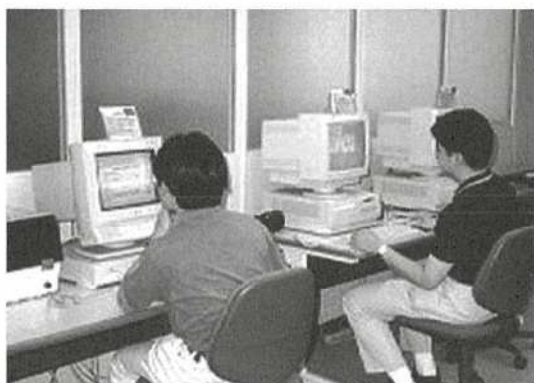
ニューメディア情報室の利用について

大野 浩 二

ニューメディア情報室を紹介するのは、実のところ2回目である。第1回目は1995年4月3日発行No.2の図書館施設紹介シリーズ初回で行われている。

当時の紹介ではCD-ROMのタイトルと所有機器の種類を紹介した簡単なものにとどまっています。まだ利用方法も固まっていなかった時期の紹介ですからやむを得ません。それから3年以上の月日が経過したのですが、その間に機種、サービスともに増え整備されてきました。

この室は図書館の3階東奥に位置します。



利用時間は平日は午前9時から午後8時30分、土曜は午前9時から午後4時30分の間と定めております。

利用手続きは、室内に入ったところにある掲示にしたがっていただければ結構です。

現在、利用できるサービスはCD-ROMの情報利用、インターネットによるWWWからの情報利用、ワープロ、表計算などによるドキュメント作成、パソコン上でのプレゼンテーション（スライド）編集作成と35mmフィル

ムへの出力が主となっています。

利用方法の詳細は基本的に各パソコンの起動時に表示される説明用のWWWコンテンツ^{*1}から得るようにしていただいています。今回はそこよりCD-ROMの利用方法を掻い摘んで紹介します。

CD-ROMは図書館で収集している資料のうち一部がこの室内で閲覧できます。実はCD-ROMはプログラムの扱いを受けて契約により提供されていたり、著作権上も紙による書物とは異なる扱いを受けるものが大半です。したがって、その契約と著作権法からみた見解により提供方法を決めています。

そのため、図書館にあるCD-ROMは個々に応じて利用方法が異なってきます。

まず、図書館の機器で利用できるCD-ROMは「CD-ROM利用方法」^{*2}という冊子に各タイトル毎に利用手順を載せて紹介しています。このリストに載っていないものは汎用性のあるソフト^{*3}により閲覧できるか、図書館内の機器で利用することができないものとなっています。

勿論この場合は貸し出し手続きにより各自のパソコンで利用していただくことになっています。

リストに載っているCD-ROMの使い方の主な手順はAppleメニュー（Macintosh）かスタートメニュー（Windows）のCD-ROM項目から各タイトルの起動ファイルを選び起動します。起動後の操作方法は各CD-ROMの付属資料を参照して各自マスターしていただくことになっています。

1998年度にはCD-ROM利用に関するアンケートをとらせていただいた結果を考慮して汎用のCD-ROMチェンジャー^{*4}を導入しましたので、より一層、利用しやすい環境となっています。

最後に図書館カードをお持ちの方は、室の利用方法にしたがっていただければ自由にご利用になれますので遠慮せずご利用ください。

【注記】

- * 1 「CD-ROM利用方法」 ファイリングして室内のキャビネットに配置しています。また、インターネットでもご覧になれます。（Acrobat Readerが必要）
<http://www.osaka-med.ac.jp/~tosho/api/nmedia.htm>
- * 2 説明用のWWWコンテンツ ニューメディア情報室の利用方法と利用者へのお知らせ事項のほとんどを、イントラネットの制限（図書館と学内の一部）でWWWコンテンツとして提供しています。
（対象機器での閲覧が目的ですので他所からのアクセスでは意味不明な場合があります。）
<http://150.22.80.115:8080/~tosho/manu/index1.html>
- * 3 汎用性のあるソフト CD-ROMを閲覧するソフトとして、ひとつのプログラムで多くのCD-ROMを閲覧できるようにしているもの。（例えばEPWING規約用検索ソフト、WWWブラウザ、Acrobat ReaderなどでCD-ROM用とは限らない。）
- * 4 汎用のCD-ROMチェンジャー 当図書館には以前より医学中央雑誌、Medline、Current Contents専用のCD-ROMチェンジャーを設置提供しているのに対して、これは様々なCD-ROMを受け入れるために設置された。（おおの・こうじ 雑誌係）



CD-ROMチェンジャーと閲覧用パソコン
（これはWindowsのセット。Macのセットも別にある。）



メインカウンター

大阪大学附属図書館中之島分館は、平成3年11月に大阪市北区の中之島地区から吹田市の吹田地区へ移転し新築開館されました。

平成4年4月、それまでの医学部分館と薬学部分館を統合して、対象とする主題分野を生命科学分野全域に拡大して、生命科学分館としてスタートしています。

交通機関としては、当初のバスに加えて、大阪都市モノレールが「万博記念公園駅」より延伸され、「阪大病院前」駅が、附属病院のすぐ前にできています。

図書館は、附属病院の西側にあり、4階建て、延べ面積は6,481m²で、図書約45万冊、雑誌約12,000タイトル、AV資料・マイクロ資料等約1,300タイトルの蔵書量です。

1階正面入口を入ると、入退館システムが設置され、広いエントランスホールとなります。右手には、ロビーとしてソファが置かれ、左手にメインカウンターと目録検索コーナー（OPAC）があり、さらにレファレンスデスクが設置されています。利用者用検索コーナーには、データベース検索用の端末が備えられています。この端末では、スタンドアロンおよび学内LANによるデータベースの利用ができます。その他1階には、新着雑誌コーナーと参考図書コーナーが配置されています。

図書館の中心に、階段、エレベーターおよびトイレが設けられ、閲覧室はそれを取り囲むように配置されています。

2階は、洋雑誌が、3階には、図書および和雑誌と洋雑誌の一部が配置されています。

生命科学図書館は、医学・生物学系外国雑誌センターとしての役割を東北大学・九州大学とともに果たしておられるため、洋雑誌の蔵書量が和雑誌に比べて多くなっています。また、雑誌については、オーバーナイト貸出のみとなっています。

4階は、LRC (Learning Resources Center) が設置され、AV資料の利用等に利用されています。その他、個室6室とグループ研究室2室、AVホール、事務室、会議室、電算室等があります。

閲覧席は、1～3階の北および南側に設置され、総数363席あります。また、集密書架は、2・3階の東および西側に設置され、複写コーナーは、1～3階の北西隅の同じ位置に設置されています。



新着雑誌コーナー

2・3階は書架および閲覧席の配置が同じ位置となっていて、同一種類の資料は、同じフロアで利用できるようにと考慮されていたが、洋雑誌の増加に伴い、少し変更になっていますが、利用しやすい配置となっています。

2階に、学内LANと接続された端末を設置したコーナーを設けられ、利用者に提供していただけます。これは、本学でも同じですが、これから利用者が直接情報収集を行う手段として、図書館の対応が求められていくものと思われます。

また、他図書館との相互利用においても、外国雑誌センターとして国内の医学図書館等から、年間に約66,000件の申込を受け付けておられます。

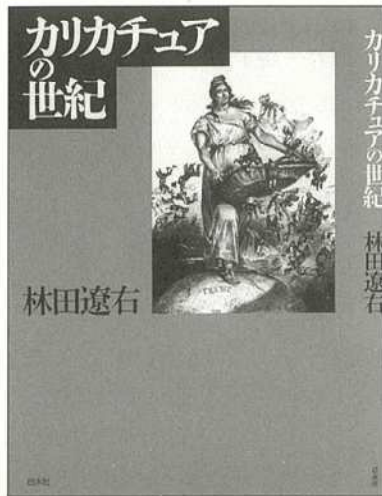
今後ますます、医学・生物学系外国雑誌センター館として対外的な利用においても重要な役割を果たしていかれることと思います。

(福広)

「カリカチュアの世紀」

林田遼右 著 白水社 1998年

中川一成



著者の林田氏はフランス文学研究者。本書は19世紀フランスの戯画の数々を興味深いエピソードを織りまぜながら紹介したもので、多数の図版が掲載されているのが何よりも嬉しい。著者が取りあげている戯画の多くは七月王政時代の政治風刺画である。例えば、当時の戯画に洋梨が描いてあれば、それは七月革命で王位についたルイ・フィリップを意味していた。ドーミエ作の「悪夢」では午睡中のラファイエット将軍の腹の上に大きな梨が載っている。七月革命の際にルイ・フィリップを支持した将軍にとってもいまや七月王政は悪夢でしかない。国の基本法である憲章に忠誠を誓う市民王ルイ・フィリップ治下の立憲君主政治が本質的にはブルボンの復古王政時代とさほど変わらないことへの明瞭な批判がこの絵には読みとれるのである。

林田氏に拠れば国王＝洋梨のイメージを定着させたのは風刺画家のフィリポンである。「カリカチュール」誌の編集長でもあったフィリポンは、自作の「栄光の三日間（七月革命のこと）のあとをとどめる塀を漆喰で塗ってしまおうとする石工」（国王を石工に見立てた絵）で有罪判決を受ける。その裁判の折、フィリポンは裁判官の前で四枚の国王の似顔絵を描いて見せた。一枚目は王そっくりで二枚目三枚目と徐々にデフォルメされてゆき、四枚目では洋梨そっくりになっている。一枚目が国王に似ているということで断罪されるなら、一枚目と似ている二枚目も断罪されねばならず、同様の理屈で三枚目も四枚目も断罪されねばならない。洋梨を描いて断罪されるとなれば、洋梨を栽培しているフランス農民も皆有罪となるのか、というのがフィリポンの主張だったそうだ。この四枚のデッサンが1831年11月号の「カリカチュール」に掲載され、以後自由主義的ポーズを取る国王は「洋梨の氾濫」に悩まされることになるのである。同誌上ではグランヴィルを中心に多くの風刺画家が作品を競い合った。フィリポンは度重なる裁判費用を捻出するためにさらに「シャリバリ」誌を創刊している。ドーミエやガヴァルニはここで大活躍をする。これらの風刺画家達の画業を林田氏は丹念に追跡している。石版画の普及によって大量の版画を安価に頒布できるようになったこともあって、カリカチュアは一大ブームを巻き起こしたのである。とは言え、著者は政治風刺画以外にも周到な目配りを忘れてはいない。1835年の九月法により検閲が強化されるに至って風刺画の対象はブルジョワやプチ・ブルジョワの風俗に移ってゆくが、いわば「歪んだ鏡」に人間の本质を映し出すカリカチュアの精神は紛れもなく息づいているのである。また、現在から見れば19世紀のパリについての貴重な歴史資料ともなっているカリカチュアは、バルザックの「人間喜劇」の小説世界とも通じている。多数の執筆者及び挿絵画家の協力によって出来上がった「フランス人の描いたフランス人」という、パリに見られる様々な人間類型を絵と文で描いたシリーズものにはバルザックも寄稿しているという。

ところで、カリカチュアには説明文が付される場合もあれば、ドーミエのように出来の良い風刺画に説明文は不要であるという立場をとった画家もいたらしい。しかし時代も国も異なる我々日本の読者にとって、専門家の解説なしに当時のカリカチュアを理解するのは難しい。林田氏の労作

はカリカチュアというジャンルへの格好の入門書であるのみならず、フランス近代史を当時の民衆の生活ぶりを含めてより身近に知る機会を与えてくれるのである。巻末の文献リストには、海外の文献とならんで、日本人研究者の著作も多数紹介されていて参考になる。絵画に興味のある読者、また風俗史を含め歴史に関心のある読者に一読をお勧めしたい。

(なかがわ・かずしげ ドイツ語講師)

近畿地区医学図書館協議会第4回シンポジウムに参加して

乾 瑠 美

1998年9月25日表記のシンポジウムが大阪歯科大学樟葉学舎で開催された。

本学図書館より大野、乾の2名が参加した。メインテーマは〈ライブラリーコンソーシアム〉で、パネリスト及び演題は次の通りであった。

1) NACSIS-ILLを利用した文献複写料金等相殺制度について

摂南大学図書館

勘川 捷二郎

熊懷 節子

2) 図書館情報ネットワークシステムの最新動向

日本電子計算(株)大阪支店情報システム営業部

文教・官公庁システムグループ係長

鳥井 伸哉

日商岩井インフォコムシステムズ(株)

第一事業部長

今門 政記

3) 電子ライブラリーコンソーシアム

ユサコ(株)電子メディアグループ

蓼沼 宏昭

4) 京都大学附属図書館における電子ジャーナル導入経験

京都大学附属図書館情報管理課

電子情報掛長

小川 晋平

〈ライブラリーコンソーシアム〉とは、図書館間の連合、提携を意味する。本館・分館間から日本全土、全世界に広がるシステムに至るまで、規模はさまざまである。内容も文献の郵便による相互利用からオンラインコンソーシアムまで多岐に亘る。今後、電子ジャーナルと並んで図書館の大きな流れになると思われる。新しい情報も多く聞くことができ、有意義なシンポジウムであった。

(いぬい・るみ 雑誌係)

本学教職員著作寄贈

山本 隆一 (医療情報部)

電子カルテが医療を変える 山本隆一 他著 1998

看護専門学校図書室

新規受入雑誌

チャイルドヘルス 1 (1998) +



図書館備付け外国雑誌を223タイトル中止

図書館では、平成11年度の外国雑誌の値上がりのため、本館とさわらぎ分室を合わせて合計223タイトルの外国雑誌を平成11年1月から中止しました。その代替措置として導入したUMI社のProquest DirectおよびBL inside webシステムをご利用ください。(備考のPQDは、Proquest Directにあるタイトル)

1999年度外国雑誌購入中止タイトル

タイトル	備考		
1. Academic medicine		54. Archives of toxicology	
2. Acta anatomica		55. ASAIO journal	
3. Acta histochemica		56. Biochemical genetics	
4. Acta physiologica Scandinavica		57. Biochemistry and cell biology	
5. Acta psychiatrica Scandinavica		58. Biological chemistry	
6. Advances in behavioral biology		59. Biophysical chemistry	
7. Advances in cancer research		60. Biorheology	
8. Advances in clinical chemistry		61. Biotechnic & histochemistry	
9. Advances in genetics		62. Brain & language	
10. Advances in human genetics		63. British dental journal	
11. Advances in neurology		64. British j. of anaesthesia	PQD
12. Advances in neurosurgery		65. British j. of nutrition	
13. Advances in orthopaedic surgery		66. British j. of ophthalmology	PQD
14. Advances in oto-rhino-laryngology		67. British j. of rheumatology	PQD
15. Advances in pediatrics		68. British j. of social psychology	
16. Advances in second messenger and phosphoprotein research		69. British medical j. ; BMJ	PQD
17. Advances in surgery		70. Calcified tissue internatiol	
18. Advances in virus research		71. Canadian j. of microbiology	
19. Advances in protein chemistry		72. CMA ; Canadian Medical Association journal	PQD
20. Aids research & human retroviruses		73. Cancer genetics & cytogenetics	
21. American j. of cardiology	PQD	74. Cell biology international	
22. American j. of clinical nutrition	PQD	75. Clinical imaging	
23. American j. of drug and alcohol abuse	PQD	76. Clinical obstetrics & gynecology	
24. American j. of medicine	PQD	77. Clinical otolaryngology & allied sciences	
25. American j. of neuroradiology		78. Clinical pediatrics	PQD
26. American j. of occupational therapy		79. Clinical pharmacology & therapeutics	
27. Annals of ophthalmology and glaucoma		80. Cold springer harbor symposia on quantitative biology	
28. American j. of orthodontics & dentofacial		81. Comprehensive psychiatry	
29. American j. of otolaryngology		82. Computerized medicine imaging & graphics	
30. American j. of otology		83. Connective tissue research	
31. American j. of pathology	PQD	84. Cortex	
32. American j. of physical medicine & rehabilitation		85. Current topics in cellular regulation	
33. American j. of public health	PQD	86. Cytogenetics and cell genetics	PQD
34. American j. of psychiatry	PQD	87. Diagnostic molecular pathology	
35. American j. of sports medicine	PQD	88. Digestion	PQD
36. American surgeon	PQD	89. Electrophoresis	
37. Angiology	PQD	90. Epidemiology & infection	
38. Annals of biomedical engineering		91. European archives of psychiatry and clinical neurosciences	
39. Annals of otology, rhinology & laryngology	PQD	92. European j. of applied physiology & occupational	
40. Annals of the rheumatic diseases	PQD	93. European j. of clinical pharmacology	
41. Annual review of biophysics and biomolecular structure		94. European j. of immunogenetics	
42. Annual review of medicine		95. European neurology	PQD
43. Annual review of microbiology		96. Evolution ; international j. of organ evolution	
44. Annual review of neuroscience	PQD	97. Experimental neurology	
45. Annual review of pharmacology and toxicology	PQD	98. Genes, chromosomes & cancer	
46. Annual review of physical chemistry		99. Geriatrics	PQD
47. Annual review of physiology		100. Gerontology	PQD
48. Annual review of psychology		101. Heart	PQD
49. Annals of allergy, asthma, and immunology	PQD	102. Hospitals & health networks	PQD
50. Applied microbiology and biotechnology		103. Human biology	
51. Archives of disease in childhood	PQD	104. Human heredity	
52. Archives of microbiology		105. Hypertention	PQD
53. Archives of pathology & laboratory medicine	PQD	106. immunology & cell biology	
		107. International immunology	PQD
		108. International j. of gynecology & obstetrics	

109. International j. of vitamin & nutrition res.
110. International orthopaedics
111. International Review of cytology
112. J. of Acoustical Society of America
113. J. of acquired immune deficiency syndromes and human retrovirology PQD
114. J. of American College of Surgeons PQD
115. J. of American Dental Association
116. J. of the American Geriatrics Society PQD
117. J. of American Society of Echocardiography
118. J. of bone and joint surgery American vol. British vol. PQD
119. J. of clinical pathology PQD
120. J. of clinical psychiatry PQD
121. J. of dental research PQD
122. J. of electrocardiology
123. J. of epidemiology and community health PQD
124. J. of forensic sciences PQD
125. J. of infectious diseases PQD
126. J. of investigative medicine PQD
127. J. of laryngology and otology PQD
128. J. of medical microbiology
129. J. of medical speech-language pathology
130. J. of membrane science
131. J. of the National Cancer Institute PQD
132. J. of nervous & mental disease
133. J. of neurocytology
134. J. of neuropathology and experimental neurology PQD
135. J. of neurology, neurosurgery and psychiatry PQD
136. J. of nuclear medicine PQD
137. J. of occupational and environmental medicine PQD
138. J. of orthopaedic and sports physical therapy
139. J. of parasitology
140. J. of physical chemistry pt. A & B
141. J. of psychiatric research
142. J. of receptor and signal transduction research
143. J. of rehabilitation PQD
144. J. of the Royal Society of Medicine
145. J. of sports medicine & physical fitness
146. J. of urban health
147. J. of virological methods
148. J. of voice
149. Kidney & blood pressure research PQD
150. Laboratory technique in biochemistry and molecular biology
151. Medical clinics of North America
152. Medical education
153. Methods in cell biology
154. Methods in enzymology
155. Microbiology and molecular biology reviews
156. Microscopy research and technique
157. Microsurgery
158. Modern healthcare
159. Molecular aspects of medicine
160. Mucosal immunology update
161. Mycologia
162. Nature biotechnology
163. Nephron PQD
164. Neuroendocrinology PQD
165. New comprehensive biochemistry
166. Nutrition reviews PQD
167. Obstetrics & gynecological surgery
168. Occupational and environmental medicine PQD
169. Orthopaedic in praxis & klinik
170. Pediatrics PQD
171. Physical therapy PQD
172. Physician and sports medicine PQD
173. Physics in medicine & biology
174. Proceedings of the Royal Society ser. B
175. Prostate
176. Public health reports PQD
177. Quarterly reviews of biophysics
178. Radiation oncology investigations
179. Recent progress in hormone research
180. Recent results in cancer research
181. Respiration medicine
182. Scandinavian j. of rehabilitation medicine
183. Seminars in liver diseases
184. Side effects of drugs annual
185. Spezielle pathologische anatomie
186. Stereotactic & functional neurosurgery
187. Strahlentherapie und onkologie
188. Surgical forum
189. Thorax PQD
190. Tissue antigens
191. Toxicology
192. Transactions of American Ophthalmological Society
193. Vitamins & hormones
194. Vox sanguinis PQD
195. WHO combined sub. statistics
196. Yale j. of biology & medicine
197. Yearbook of diagnostic radiology
198. Yearbook of drug therapy
199. Yearbook of medicine
200. Yearbook of neurology & neurosurgery
201. Yearbook of nuclear medicine
202. Yearbook of obstetrics, gynecology & women's health
203. Yearbook of oncology
204. Yearbook of ophthalmology
205. Yearbook of orthopedics
206. Yearbook of pathology & laboratory medicine
207. Yearbook of plastic, reconstructive and oesthetic surgery
208. Yearbook of psychiatry & applied mental health
209. Yearbook of surgery
210. Yearbook of urology
- さわらぎ分室中止タイトル
1. Annual review of cell and developmental biology
 2. Biochemistry
 3. Biophysical journal
 4. Journal of cell biology
 5. Journal of general physiology
 6. Journal of membrane biology
 7. Journal of molecular evolution
 8. Nature genetics
 9. Nature medicine
 10. Review of modern physics
 11. Scientific American
 12. Scientist
 13. Trends in genetics
- 新規購入タイトル
1. American journal of kidney disease
 2. Cerebrovascular disease
 3. Trends in pharmacological sciences

新人スタッフ紹介

引越し癖??

村上 公子

はじめまして、新しく図書館の職員に仲間入りしました。むらかみきみこです。私の紹介など、読んでも仕方がないと思ってらっしゃる方もおられるとは思いますが、しばらくの間お付き合いください。

生まれは大阪、育ちはあちゃこちゃです。と、いうのもうちの家は、引越しがやたらと多い家だったのです。大阪市内に、新しい家を買って、「ああ、新築においやねえ。」とっているうちに父の転勤。東京で家が見つかるまでの仮住まいということで、足立区に一年ちょっと。家が見つかったというので、江戸川区に引越し。五年経ったかどうかといったときに、こんどは、会社のほうから大阪



ウズベキスタン共和国の首都タシュケントで、
おちびさん達と記念に一枚

に戻ってこいというわけで、現在すんでいる宝塚に落ち着くことになりました。(もう転勤はないでしょう、引越しも) 四つの小学校、二つの中学校に通いました。小学校など、クラス替えと同じ位の頻度で、転校していました。転校納めの中学校にいたっては、半年も通っていないうちに卒業式でした。(同学年に知らない人がうじゃうじゃいました。) だから、私には中学校の卒業アルバムが二冊あります。しかもどちらにも、私の写真は写っていたりします。ちょっと

すごいでしょ。さらに、司書の資格を取って、図書館という職場とかかわりはじめてから未だ三年目ですが、大阪医大で三つ目の職場になります。(正規職員としてはここがはじめてですが。) まだまだ、私の“お引越し人生”は続くのでしょうか?。そればかりは、まさしく“神のみぞ知る”です。

と、“お引越し”になれてしまったせいも手伝ってかどうか、知らない土地に行くことが大好きです。ほとんど趣味です。もちろん観光地にも脚を伸ばしますが、何でもなさそうな裏道を歩くほうが好きです。でも、かといってそう行った場所にある古道具屋さんや、古本屋さんには、どうも入る勇気がありません。本当は、とても興味があるのですが、なんだか、ただでは出てこれられないような感じがしませんか?。

このような私ですが、どうぞよろしく願いいたします。尚、私に効率のいい引越しの仕方を尋ねられても、回答いたしかねますのでご了承ください。(整理・梱包は不得手なもので)

(むらかみ・きみこ 庶務係)

図書館業務日誌

9月

- 8日(火) 次期図書館システム打合せ会
(於、図書館会議室)
- 10日(木) 平成10年度第4回図書館合同運営委員会
(於、図書館会議室)
- 18日(金) 日本医学図書館協会企画・
調査委員会 (於、関西医大)
- 18日(金) - 19日(土) エルゼビアユーザ会に館員参加
(於、東京)
- 24日(木) 館長選出規程検討委員会
(於、図書館会議室)
- 25日(金) 平成10年度近畿地区医学図書館協議会
シンポジウムに館員参加
(於、大阪歯科大)
- 29日(木) 日本医学図書館協会総務会
(於、協会中央事務局)

10月

- 2日(金) 次期電算化システム機器一部搬入
- 12日(月) 医学情報処理センターUser会
(於、第二会議室)
- 14日(水) - 16日(金) Proquest Direct
システム利用説明会
(於、ニューメディア情報室)
- 20日(火) 次期図書館システム打合せ会
(於、図書館会議室)
- 22日(木) 平成10年度第5回図書館合同運営委員会
(於、図書館会議室)
- 24日(土) 本学父兄会が見学来館
- 28日(水) 日本医学図書館協会資料保存委員会
(於、本学図書館会議室)
- 29日(木) 日本医学図書館協会理事会、評議員会
(於、本学第一会議室)

11月

- 4日(水) - 5日(木) BL inside webシステム利用説明会
(於、ニューメディア情報室)
- 6日(金) 次期図書館システム打合せ会
(於、図書館会議室)
- 9日(月) UMI社J. P. Gray氏 (国際市場
開発専門員) が本学図書館を訪問
- 17日(火) 学術情報センター新IR及び
新CAT/ILLシステム説明会に館員参加
(於、京大農学部)
- 20日(金) 次期図書館システム打合せ会
(於、図書館会議室)
- 26日(木) 平成10年度第6回図書館合同運営委員会
(於、図書館会議室)
- 30日(月) 日本医学図書館協会総会組織委員会
(於、福岡大学医学部)

12月

- 10日(木) 日本医学図書館協会総務会
(於、協会中央事務局)
- 11日(金) 近畿地区医学図書館協議会例会
(於、奈良医大)
- 17日(木) 平成10年度第7回図書館合同運営委員会
(於、図書館会議室)

編 集 後 記

今回の館報は新春号として、企画しました。本年3月末日をもって退職される、河村先生、岩崎先生には大変お忙しいところを、無理をお願いして執筆していただきました。また、牧氏には「21世紀の医療環境」というテーマで前回に続いて、エッセイのシリーズをお願いしました。その他沢山の方に執筆していただき、ありがとうございました。表紙のカットは、恒例により北村達郎氏にお願いしました。読者からの投稿やご意見を歓迎いたします。

(茂幾)

OMNIBUS「大阪医科大学図書館報／大阪医科大学附属看護専門学校図書館報」

No.13号 1999年2月6日 発行

編集・発行 大阪医科大学図書館

〒569-8686 大阪府高槻市大学町2-7

TEL (0726) 83-1221

(内線2799, 2621)

印刷 大日本印刷株式会社